近世・近代日本における中國の戯曲・小説
―その讀まれ方をめぐって―

楊　維公

【要約】

日本では、中國文學を讀むことは長い歴史を有するが、近世以前はその讀む對象は中國語の古典文で書かれたものが大半を占めた。近代以降、古典文つまり漢文は引き續き教養の一環として讀まれ續けたが、戯曲や小説なども現代日本語譯され陸續と刊行されている。戯曲と小説も、その成立をたどると間違いなく古典の枠に入るとは言え、日本で作られた初期の中國文學史では、戯曲と小説が文學と見做されるか否かは大きな問題であった。日本人が中國文學を讀む歴史を考察する際に、戯曲と小説の讀まれ方とその變化はやはり避けては通れない問題である。本論文は、日本で刊行または抄寫された戯曲や小説のテキストおよびその周縁資料を利用し、江戸から明治・大正にかけての中國戯曲・小説の讀まれ方を分析する。

序章「日本における中國の戯曲・小説の讀まれ方という問題」では、中國文學史における戯曲・小説の特殊性を再確認の上、「讀まれ方」という用語および中國の戯曲・小説の日本における讀まれ方を研究する意味を説明する。併せて、日本で刊行または抄寫されたテキストを使用する理由を述べる。

第一章「「妙文」の「讀法」―江戸時代における『第六才子書』の讀まれ方―」では、金聖歎が編纂した『第六才子書』こと『貫華堂第六才子書西廂記』の江戸時代における讀まれ方を論じる。まず、曲亭馬琴の書翰と日記を利用し、そこに見られる『西廂記』に關する記述は實は『第六才子書』にしか見られないことを指摘し、『第六才子書』が日本で實際に『西廂記』として讀まれたことを立證する。しかし、それにもかかわらず、遠山荷塘による二本の『西廂記』の寫本はそれを底本にしていない。この二本を比較すれば、慶應義塾大學斯道文庫所藏のａ本より、國立國會圖書館所藏のｂ本は金聖歎『第六才子書』への言及がはるかに多いことがわかる。本章では二本のテキスト上の相違を比較檢討した上で、ａ本とｂ本は執筆の目的が異なることを分析する。ａ本の目的が、會讀や講義において原文を唐音で發音するためであることは、先行研究で指摘されているが、未完成の狀態にあるｂ本の性格については、議論が盡くされているとは言い難い。本章では、ｂ本がａ本に比べて多くの金聖歎評を記すこと、また當時の文人において金聖歎が如何に評價されていたかを分析した上で、荷塘は、會讀など公の場で使用するためにこしらえたａ本で意圖的に排除した金聖歎の痕跡を別にｂ本に殘し、個人で讀む時の內容理解の手助けにしようとしたことを論じる。換言すると、『第六才子書』をできるだけ排除したａ本は集團的な音讀の讀書方式に繫がり、一方、讀み物として特化された『第六才子書』は個人的、內面的な默讀によって讀まれたということになる。この個人的な讀まれ方の出現から、日本における中國文學が、傳統學問よ

り廣い意味での樂しむための讀み物に變容する萌芽が見出される。

第二章「詩で讀む「傳奇」―和刻本『蒲東崔張珠玉詩集』と江戸時代における西廂故事の讀まれ方の可能性―」では、『蒲東崔張珠玉詩集』という『西廂記』に描かれた張生と崔鶯鶯の戀物語を七言律詩の形で傳える詩集を考察する。その內容から見れば、『珠玉詩集』は演劇文學である『西廂記』をより傳統的な七言律詩の形式に置き換えて表現するコンパクトな作品群であり、同種の詩集としては完成度が比較的高い。ただ『珠玉詩集』は『西廂記』のあらすじを手っとり早く把握するのに有効であるものの、七言律詩だけで『西廂記』の物語を存分に語るには限界がある。萬曆年間以前に刊行された様々な『西廂記』テキストに收錄されたにもかかわらず、中國では『珠玉詩集』單行本の存在は確認できない。また、付錄として『珠玉詩集』を收錄する『鼎鐫陳眉公先生批評西廂記』に付記される識語ではその出來榮えを酷評している。さらに萬曆後期以降刊行され、のち『西廂記』の主要テキストとなった王驥德『新校注古本西廂記』や凌濛初『西廂記』ないし金聖歎『貫華堂第六才子書西廂記』などは『珠玉詩集』を收錄せず、作者とされる張楷も、錢謙益『列朝詩集』に付される小傳では批判めいた口調で語られている。しかし、中國のこうした狀況とは對照的に、日本では『珠玉詩集』が單行本として世に傳わり、序文は『珠玉詩集』を宋玉の賦と竝べるものとして高く評價している。また、狂詩人の植木玉厓や艶本作者の花笠文京などにも『珠玉詩集』についての言及が見られ、さらに大田南畝も玉厓の記述を自身の随筆集『一話一言』に抄出するなど、『珠玉詩集』は江戸時代の文人の中でそれなりの關心を集めていたことが明らかである。また、張楷の他の作品も日本に將來されており、『珠玉詩集』が和刻本として出版される基盤は存在した。傳奇を白話である原典そのもので讀まず、傳統的かつ日本人にとって馴染みの深い漢詩で把握する讀み方からは、物語性のある作品を個人で樂しむ中国古典の讀み方が出現していたことが窺える。

第三章「『唐土名妓傳』と『柳橋新誌』―近世日本における『板橋雜記』の讀まれ方―」では、清初に成立した、明末金陵の花街の繁華を追慕した余懷『板橋雜記』を扱う。『板橋雜記』は江戸時代に日本に傳わり、日本語譯付きの和刻本とその改題本『唐土名妓傳』が出版された。さらに、江戸末期から明治初期にかけて刊行された成島柳北の『柳橋新誌』も『板橋雜記』から影響を受けたものとされる。明治維新と相前後して刊行された『柳橋新誌』初編・二編の序文はともに時代の轉變とそれに伴う花街の轉變を強く意識しており、それはまさに余懷が『板橋雜記』を撰した目的と一致している。この場合、花街は卽物的な存在より、日中兩國における一つの共通した文化的象徵としての機能を有する。しかし、時代を遡って、『板橋雜記』に日本語譯をつけて換骨奪胎させた和刻本『板橋雜記』およびその改題本『唐土名妓傳』は「唐土」つまり中國の有「名」な「妓」女の物語という側面を重視し、新たな序文が付されたり、元の序文が置き換えられたりするのも、もっぱら妓女に意識の中心が置かれる。このように、和刻本出版を巡る狀況は、余懷が作品に込めた時代の轉變への悲哀と大きなずれが生じているように見える。また、喜多村信節が撰した『嬉遊笑覽』に江戸の風俗と中國の花街の事情と比べるために『板橋雜記』を引用する記述が散見されるが、王

朝交代のことに言及する記述はほとんど見當たらない。これも『板橋雜記』の遊里文學の側面が多分に強調された結果と考えられる。つまり、和刻本『板橋雜記』および『唐土名妓傳』を、江戸の人々は中國の花街の手引書として讀んで樂しみ、そしてそれを通じて中國の民間風俗に關する知識を手に入れていたのである。それに對して、明治維新の激變を生きた成島柳北を代表とする文人は、『板橋雜記』の背後にある時代の轉變に著目し、さらに自身の經驗がそれに重なっていることも影響して、自らの作品の創作にも繋がる讀み方をするようになったことが見てとれる。つまり、中國古典のある一つの作品に、異なる經驗や目的によって異なる讀まれ方がなされたことが指摘できる。

第四章「江戸後期における叢書『說鈴』利用についての小考」では、清の吳震方が編纂したとされる『說鈴』という叢書の江戸時代における利用狀況を簡單にまとめる。まず、喜多村信節『嬉遊笑覽』には『說鈴』所收書物の直接引用がしばしば見られる。第一章で利用した遠山荷塘による『西廂記』寫本にも『說鈴』所收『言鯖』の引用があった。また、『說鈴』所收『蓴鄉贅筆』からの引用も大田錦城『梧窓漫筆』に見られる。この『蓴鄉贅筆』をめぐって、『說鈴』の版本によって收錄に異同が見られることも大田南畝『一話一言』は指摘しており、當時の文人が『說鈴』にかなり關心を持っていたと推測できる。さらに、第三章でとり上げた『板橋雜記』は複數系統の版本を有するが、單行本として和刻されたのは『說鈴』所收系統のものである。『說鈴』所收の書物は中國の民間風俗や傳聞を記す雜多な筆記類であるが、それらが江戸時代においてそれなりに讀まれていたことは、當時の日本人が中國の民間風俗に目を向け、自分の趣味に應じて中國の書物を利用していたことを示す。

第五章「中國の日常風景の發見—井上紅梅の目に映った『金瓶梅』—」では、1923 年に上海の日本堂書店によって刊行された井上紅梅譯『金瓶梅：支那の社會狀態』を中心に、近代以降に刊行された中國古典小說の日本語譯を手がかりに、その讀まれ方を檢討する。『金瓶梅』自體は江戸時代の早い時期にすでに日本に傳わっていたが、日本語による譯や語釋書に關してはその物語の母胎となる『水滸傳』の流行ぶりとは異なり、さほどの影響力は持たなかったようである。一方、明治以降、日本における『金瓶梅』の受容はその評價の向上とともに急速な進展を見せ始め、大正後期に井上紅梅によって口語による全譯の試みも行われた。ただ、井上紅梅や日本堂書店によって刊行された他の書物の特徵を見れば、その書物のほとんどが中國の大衆文化を紹介する著述であり、『金瓶梅』のような古典文學の翻譯は極めて異例の存在に見える。また、當時の正統的な學者による翻譯である『國譯漢文大成』のおおむね訓讀による譯と井上紅梅の譯とを見比べれば、井上紅梅譯のほうがはるかに讀みやすく、しかも彼が訓讀と口語譯を使い分けていることがわかる。さらに、井上紅梅譯『金瓶梅』に注釋として付される「譯餘閑談」に現れた言葉から見れば、その內容の大半は中國の日常文化の紹介であり、そこには『金瓶梅』譯に先立って刊行した『支那風俗』という書物へとリンクする記述も散見される。それらの記述は、實は大正後期から昭和初期にかけて井上が著した一連の書物と共通する。また、近年の研究では、『金瓶梅』自體も「百科事典的」な書物と言われ、その性格が井上による『金瓶梅』の讀まれ方を可能にしたとも言

える。近代の『金瓶梅』によって、日本での中國文學に對する認識とその讀まれ方において一種の新たな價値體系が構築されたと考えられる。そして、井上紅梅は序文において『金瓶梅』が人間世界の惡の一面をさらし出す文學作品としてヨーロッパのものより四百年も早いと強調している。それは、中國古典文學と西洋近代文學の間に『金瓶梅』を位置づける重要な意義を持つ發言で、『金瓶梅』自體の價値の再考を促す意味を持つのみならず、日本語の口語譯の試みを通じて、日本における中國文學とその讀まれ方がいかに從來の傳統學問から脱卻し、世界文學の枠に溶け込んでいったかを考える絲口になるとも考えられる。

終章「傳統學問の枠を超えて―日本における中國文學の讀まれ方の多樣化―」では、本論文の全體像を總括し、近世・近代日本における中國の戯曲・小說の讀まれ方の多樣化とその意味を檢討する。併せて本論文で論じきれなかった點や今後の展望を述べる。